

はじめに

この物語はフィクションです。

登場する人物、団体等はすべて実在しません。

あらかじめご了承ください。

小松 とんねる

両陣営の合宿は何事もなかったかのように進んだ。あれから和仁とめぐみがリネン室で  
かち合うことこそなかったが、自由時間に外出したコンビニでばったり出くわしてから少  
しの間雑談したりと、そんな他愛もないことがかりんとも起きた。ついでに言えば和仁は  
ついに箱崎の追及を避けきれなくなり、年上の女子二人に箱崎を紹介し、4人で夜中のロ  
ビーにてポーカーで遊んだりもした。そのぐらいだ。

金曜日の夜。

和仁は夕食後のミーティングと入浴も済ませて、自由時間にふらふらと散歩に出かけた。  
町のすぐ近くなので、散策も退屈ではなかった。偶然、かりんと出くわした。

「おや」

「こんばんは」

かりんも一人だった。和仁は防寒対策にウィンドブレーカーを、かりんはダッフルコー  
トにマフラーを捲いていた。二人が出くわしたのはシャッターの閉められた店が並ぶ商店  
街の一角だった。

「危ないですよ、女性がひとりで出歩いてちゃ」

「その女性から昨夜さんざんお金を捲き上げたのはどこのどいつだ」

「賭博は犯罪行為です。あれはあくまでもゲームを楽しんだ謝礼金として受け取ったん  
です」

「ナマイキい」

もつと高校生らしく振舞いなさいな、と頭をヘッドロックの形で抱えられた。もちろん  
本気ではないのでかりんの体温と吐息を直に感じることでできて和仁からすればむしろラ  
ツキーだった。

ほんの数日の関係ではあるが、じゃれ合う仲になることができたのはお互いの相性の良さもあったのだろう。和仁は決して社交的な性格ではないと自己分析している。かりんの人柄があったからこそ、なのかもしれない。

「ねえ、帰って何かやることある？」

「いえ、特に。もうあとは寝るだけですよ」

「練習は明日が最終日だよね？」

「はい」

「またちよつと悪いこと、しよか」

何日か前に食堂で見せた表情と同じものをかりんが見せた。二人でサボろうと提案してきたときの顔だ。

「いいところ見つけたんだ。来る？」

「は、はい」

素直に彼女の背中について行った先には、和仁らが寝泊まりしているところは別の小さな温泉宿があった。

「部屋とってなくても温泉は入れるらしいよ」

「うわー、いいですね」

ほんとに観光に来てるみたいですね。

「でしょ」と嬉しそうにかりんもうなずく。

受付カウンターに立っていたのは年配の女性が一人だけだった。二人を見てにこやかな顔つきで「家族風呂が空いておりますが」と提案してきた。

家族風呂。温泉での貸切風呂のことである。普通の浴場よりも狭いが、プライバシー空間が保たれている中で温泉に浸かることができる。

かりんはちらりと横目をやりながら「ラッキーだね」と言った。和仁に「一緒にいいよね」と訊くので彼も首を横に振るわけにもいかず、「そうですね」とさりげない返事になるよう努めた。内心では心臓が破裂しそうだった。

暖簾をくぐった先には狭い脱衣場があった。

がちやん、とかりんが鍵をしめる。

「すごい、アタシも家族風呂は初めてだけどこんな風になってるんだ」

「ちよ、かりんさん」

鍵がしめられて、はじめて和仁は慌てる態度を露わにすることができた。

「いいじゃないか、せっかくなんだし。それに」

「それに？」

「めぐのこと、好きなんですよ」

固まってしまった和仁に、かりんは優しい声をかけた。バレバレだよ、と。

「アタシじゃ役不足かもしれないけどさ、ちよつと女の子にも慣れておいたほうがいいかなって思ったよ。まあそれは建前たてまえで、単にアタシがお風呂に入りたかっただけなんだけどもね」

ぺろっと舌を出す。和仁にはどこまでその言葉が本気なのかわからなかった。すべて本音かもしれないし、すべて嘘なのではないか、とも思った。

「ほら、入るよ」

彼女はコートとマフラーをとり、めぐみが着ていたものと同じスウェット姿になった。やはり大きな胸が目立つ。仕方なく和仁も上着を脱ぎ、ジャージを脱いで上半身裸になる。

「良い身体だね」と、かりん。

「恥ずかしいですよ」

和仁からすればわけもわからずにここまで来てしまったという面持ちだ。

——ほんとにかりんさんの裸を見ていいのかな。

本音を言うと、今すぐにも彼女を抱きしめたいと思った。あの大きな胸にしゃぶりつきながら、硬くなった肉棒を彼女のお腹にこすりつけたいとすら思った。彼女は怒るだろうか、それとも受け入れてくれるだろうか。17歳の頭にはもはや温泉に浸かるのではなく、そのことで頭がいっぱいになってしまっていた。

「お先に」

「え」

気がつくと後ろですでに用意を終えていたのか、タオルを巻いたかりんの後ろ姿が露天風呂へと消えていった。どうやら和仁が逡巡<sup>しゅんじゆん</sup>している間にさっさと服を脱ぎ終えてしまっていたらしい。はやくおいでよー、と反響した彼女の声が戸の向こうから聞こえた。

「はい」

ふと、彼女が衣服をたたんだカゴに目をやる。ピンクの下着が無造作に置かれてある。

——うわ、かりんさんの履いてたパンティだ。

パンティ。

その言葉を頭の中に浮かべるだけでひどく淫らな気持ちに襲われる。こっそり見てしまおうかと彼の中の悪魔が囁いている。

——いや、だめだ。

せつかくこの数日で築き上げた信頼関係をここで崩すわけにはいかない。でも見たい。

——いや、だめだ。

彼にとつては大変な努力だった。どんなきついトレーニングよりも忍耐を必要としたが何とか理性を保つ。彼女の使用したカゴから目を逸らし、ボクサーパンツを脱ぐ。すっかり勃起した彼のペニスは天井を向いてそそり立っていた。

——どうしよう。

ここでいくら待っていても収まりはしないだろう。自分で処理する時間もない。仕方なくそのうえにタオルを捲いてみる。地面と平行するようにテントが張られた様はかなり不格好だった。

——ええい、もう。

どうしようもなかった。彼は勇気を振り絞って風呂場への戸を開けた。

「おそいよー」

かりんは足元だけ湯に浸かる形で岩場に腰かけていた。胸元までタオルを捲いているので肝心な部分は隠されていた。

「すみません」

「気持ちいいよ」

無邪気に笑う彼女を見ると、ふしだらなことばかり考えていた自分が嫌になる。その嫌気が幸を奏したのか、すこしだけ勃起が収まったようだった。それでも前屈みになりながら、彼女の向かい側に和仁も腰かける。

「いいですね」

「でしょ、穴場だよね」

竹柵で覆われた家族風呂は身体を洗う際の蛇口と湯桶が4つほどしかない、小さな露天風呂だった。他には誰も入ってこないことも考えると、湯と一緒に贅沢な気分になることのできる場所、ということなのかもしれない。

「さっきの話だけだよ」

「はい」

「カズ君はめぐのこと、実際どう思ってるの？」

「いや、どう思ってるっていうか、なんていうか」

わからなかった。好き、なのは確かだ。けれど実のところまだめぐみのことを彼はほとんど知らないのだ。自分の「好き」がどこから来ているのかわからない、とその旨をかりんに打ち明ると、相手はケラケラと快活な笑い声をあげた。

「真面目なんだね」

「そう、ですか」

「アタシも偉そうなことは言えないけどさ。いいんじゃない？ 好きなら好きで理由なんかなくても。いっかい遊んでみるのもアリだと思うよ」

遊ぶっていうのはゲームだとかカラオケのことじゃないことはわかるよね？ とかりんは続けた。

「は、はい」

「まあ東京に戻ってもさ、連絡してよ。アタシもカズ君みたいなかわいい弟みたいな子とはなかなか知り合えなくて」

「でも大学でも後輩さんたちとかいるんじゃないんですか」

「いるけどさ」

そこで彼女は大きく伸びをした。深い谷間が晒される姿に和仁はどきまぎするしかなかった。海綿体に血が溜まっていき、収まりかけたペニスに熱い息吹が戻るのを感じる。タオルの布越しとはいえ、勃起を彼女に晒すわけにもいかず、和仁は手で前を抑える。

「ふふ」

「え」

「君を見てると、なんだかほんとかわいい弟ができたみたいで嬉しい。アタシ末っ子でさ。面倒をいつも見てもらえる側だったから」

「末っ子、ですか。ぜんぜんそんな風に見えませんが」

「カズ君は？」

「姉がひとり、います。今はその姉と二人暮らしなんです」

「へえ、またどうして？」

彼は口をつぐんだ。別に言うのが嫌であったわけではないが、言うべきことなのかわからなかったからだ。せっかくの楽しい雰囲気を崩したくはなかった。

「あ、ごめん。踏み込んだこと訊いちやって。でも、そっか。いろいろあるんだね」

「すみません、ともう一度彼は言って「いろいろ、あるらしいです」と笑ってみせた。」

「でもいいなーお姉さんが羨ましい」

「そうですか」

「そうだよ。こんなかわいい弟がいるなんて。お姉さんと仲は良いの？」

「悪くはないと思いますけど」

嘘ではなかった。ただいかんせん年が離れていることもあり、一緒に遊ぶ間柄でもないことも確かであった。

「さーて」と、かりんがおもむろに立ち上がった。

足の付け根にある奥の繁みが一瞬だけ見えた気がした。

——やばっ。

ペニスが手の下でどくんどくと脈打っているのを感じた。

「じゃあかわいい弟の背中を流してあげよう、おいで」

手招きされた。

「く」

「へ、じゃないでしょ。はやく」

うう。

蛇口のところには鏡が備え付けられており、身体を洗っている者の姿をそこで確認できるようにになっている。和仁は今、湯桶に腰かけてタオルも外された状態でそこにいた。

「誰かに背中を洗ってもらえるのって気持ちいいでしょ」

後ろでかりんが言う。

「は、はい」

彼は答えながらも勃起を抑えるので精一杯だった。

——うう、女の人の手、なんでこんなに気持ちいいんだろう。

直に触られることで彼女の温もりがダイレクトに皮膚を刺激してくる。ときどき肩同士が当たったり、それよりも柔らかい何かが背中を突いたりする。

——もしかして、おっぱい？

考えただけで下半身に力が入ってしまう。自然と彼はつま先を反らせて身体をこわばらせている。両手で必死に前を抑えている高校生が鏡に映る。

「はい、腕も」

「ああ、ダメですよ」

「ダメ？」

妙に艶のある声で訊かれると、もう否定できなかった。

「うう、お願いします」

「ふふ、よろしい」

てつきり片手ずつ洗われるのかと思っていた和仁は「とりあえず洗われていないほうの手で前を隠そう」と考えていた。甘かった。彼女は和仁の両腕を反らすようにして同時に

背中側へもっていったのだ。自然、鏡には和仁の最大限に勃起したペニスが晒されることになる。

「あああ！」

「ん、どうしたの？」

「い、いえ何でもありません」

——ぜったいバレてる。

鏡にはおそらく特殊なコーティングがされているのだろう、この湿気でも曇ることなく風呂場を反射させている。その中で勃起したピンク色のペニスがびくんびくんと跳ねる間抜けな様もしつかり映し出されている。せめて足を閉じようとするのだが、興奮の渦が彼の脳の回路さえも鈍らせているせいか、身体が言うことを利いてくれない。鼻歌まじりにボディソープを伸ばすかりんの、白い太ももが眩しく光っている。

——うう、ああ。

かつてない羞恥心に襲われながらも、不思議と嫌な気持ちはしなかった。彼自身も知らなかった性癖が今、皮剥かれようとしているのだ。

「じゃあ前向いて」

「はい、え」

「え、じゃない」

「いや、それは勘弁してください」

「どうして？」

ようやく解放された腕でしっかり前を抑える和仁に、かりんがその耳元に口を寄せた。

「わかっているから安心して。大丈夫だから」と優しく囁く。

——やっぱり！

全部バレていたのだ。彼女相手に欲情してしまっていることを。

「い、いつからですか」

「うーん、脱衣場のときからかな。というか、カズ君は会ったときからアタシの胸ばかり目がいつてるから、そりゃね」

「すみません」

「ふふ、いいの。だいたいここに誘ったのはアタシだしね。男の子だもん」  
だからほら、気にせず、ね。

「ち、違うんです、僕」

「なに」

「あの、その」

和仁は腹を括った。

「僕、小さいんです」

「え」

「あの、すごく小さいんです。ここが。だから恥ずかしくって」

時間が止まったような気がした。かりんの後ろで落ち葉がひとひら、ゆつくりと舞いながら湯の上に落ちた。波紋が広がる。

「あっははは！」

「笑いごとじゃないですって」

大笑いしてタオル越しに自分のお腹を抑えるかりんに、和仁はうなだれながらも憤慨する。

「ごめんごめん。そっか、男の子って気にするんだね、そういうこと」

「そりゃやっぱり、同級生のとかと比べると明らかに小さいんですから」

「あのね、カズ君。女の子はそんなのぜんぜん気にしないから、いいんだよ小さくても。」

まあ気にするって口に出して言う子もいるかもしれないけど、そんなのほんとに気にしないでいいよ。大切なのはもつと違うところにあるんだから」

理屈はわかる、が。

「ほら、だから勇気を出してアタシに見せて。どんなものか見てあげるよ」

「は、はい」

なんとなくさつき彼女が大笑いしてくれたおかげで幾分、羞恥心のほうはまだマシになりつつある。それでもじゆうぶんに恥ずかしい。彼はゆつくりと振り返ることにする。前

を隠しながら。

「ほら、足も開いて」

かりんは和仁が開いた膝の間に座り直す。大きなお尻が彼女のボディラインを妖艶に見せていた。むっちりとしたオオルから突き出たバストとヒップはどこまでも女性的な魅力に満ちた輪郭をしていた。

うながされて諦めたように手をどける。

「ああ、見ないでください」

そして彼は、女子大生に自分の幼いペニスをさらけだしていた。

「あ、かわいい」

「うう」

びくん、びくん。

勃起したペニスが彼女の目の前で震える。

「皮もかぶってるんだね」

「い、言わないでください、恥ずかしいですよー」

かりんはまじまじとそれを見つめていた。「近いですって」という和仁の言葉は無視された。

「ふーん、なるほどね」

「何がなるほどね、なんですか」

にやり、と悪そうな笑みを彼女は浮かべた。

「お医者さんごっこ、しょっか」

「へ」

「やったでしょ、子どものとき。アタシが先生でカズ君は患者さんね」

「僕、もう高校生なんですけど」

「誰も見てないんだし、いいじゃない。あ、ちなみに泌尿器科だから」

「なんですか、その設定」

いいからいいから、と彼女は和仁の腰をつかみ、桶にしっかり座り直させる。もちろん

足は開かれたままだ。

「はい、カズ君は今日はどうしたのかな」  
どうやら物語はすでに始まっているらしい。彼女の優しい声色が奇妙な高揚感を味あわせてくれる。

「え、えーと実は先生に相談があつて」

「なーに」

「ココが小さいのが悩みなんです、先生、どうしたらいいでしょうか」  
ペニスが跳ねる。亀頭は夜空に向けて脈動している。

「ココってどこかな」

「うう、言わなきゃだめですか？」

もちろん、とかりん医師は笑顔でうなづく。

「ち、ちんちんです」

「ふーん。カズ君はちんちんが小さいことが悩みなのね」

——ああ！

かりんの口元から淫らかな言葉が出てくるだけで、和仁のペニスは激しく唸った。

「あれ、先生がちんちんって言うと、コレがびくんって動くのね」

「ううう」

「確かにこれは重病かも。もう一度言うね？」

ちんちん、ちんちん、カズ君の小さいちんちん。

「ああ！ 女の人がそんな言葉口にしちゃダメですって」

かりんの目の前で小さな、しかし硬くどがった肉棒が幾度も跳ねる。それをじーつと彼女が見ている。恥ずかしさが何倍にもなって彼を襲う。

「うう、かりんさん、恥ずかしすぎますって」

「でもここはすごく嬉しそうに跳ねてるけど」

「それは違うんです」

「んー何が違うのかな？」

ふーっと彼女の息吹が先っぽに当たる。それだけで「ああ」と声を挙げずにはいられなかった。

ああ！

「違うんですすみません。恥ずかしいのが、どうしてか興奮しちゃいます」

「そうでしょー。そういう人、何ていうか教えてあげよか」

「な、何ていうんですか」

かりんが再びささやいた。

へんたい君、って言うんだよ。

ああ！

びく、びく、びくん。

「へんたいって言われて嬉しくてたまらないんですよ。カズ君は口よりも下の僕ちゃんのほうが素直で良い子みたいだね」

「ぎ、ごめんなさい」

「あら？」

彼女は覗きこんだ。ニスにさらに顔を近づける。

「先っぽからなんかお汁が出てるね。これはお湯とは違うみたいだけど何かな」と、人差し指でちよこんと肉棒の先端をつつく。

「あああ！」

触られた！ 女の人に触られた！

それを合図にさらに肉棒の先端部分から透明の液体が溢れ出て、彼の亀頭部分を妖しく光らせる。かりんの指は容赦なくその液体を肉棒の側面部分にも塗りつけていった。棒が小さいおかげで二本の指を使うだけでまんべんなく塗られてしまう現実が悲しいが、和仁にはその悲しみを味わう余裕もない。

ぬちゅ、くちゅ。

「あれ、イヤらしい音も聴こえるね。ねえ、これはなに」

「あ、もうダメです、かりんさん許して」

「許す？ アタシはこれが何か訊いてるだけなんだけど。何か先生に教えてくれないかな、ほら」

指の動きがだんだん肉棒をしごく動きに変わってゆく。たまらず和仁は悲鳴に近い声をあげた。

「あああ！ い、言います。我慢汁です」

「んー、もしかしてエッチなこと考えてたんですかね」

「は、はい。先生にしごいてもらうなんて夢みたいで」

「あら、これは診察なのにしごくだなんて、イヤらしい。カズ君はいけない患者さんです。すね。だいぶへんたいが蔓延してしまっているようです」

しゅ、しゅ、くちゅ、ちゅぷ。

かりんの指の動きがだんだんと激しくなっていく。

「あ、かりんさん本当にもうダメです、僕、我慢できません」

足を開いたままの状態で和仁は首をイヤイヤと横に振った。6つに割れた腹筋は波打ち、つま先もびくびくとペニスの脈動に合わせるように震えた。

「んー、我慢できないとどうなるの？」

「で、出ちやいます。かりんさんにかかっちゃいますって！」

「出る？ 診察中なのに先生にぶっかける気？」

「だ、だって先生の指が、あー」

「これは触診なんです。エッチなことばかり考えるへんたい君だからダメなんです、我慢できませんか？」

「む、無理です。あああ」

彼はそれでもそれを抑えようと楽な姿勢になろうと体勢を変えるべく、膝を曲げた。結果的にそれは彼女に対してM字開脚する羽目になり、深い羞恥心が彼を襲った。羞恥心はそのまま快樂につながる。

「あら、自分からそんな恥ずかしい格好するなんて、ほんとのヘンタイ君だね。女の人に射精するところ見られたいのね」

「あーち、違うんです！」

イヤイヤ、と首を振り続ける和仁だが、とろけるような表情と宙に向かって前後する腰は何の説得力もなかった。

「あらー、腰まで自分で動かして。そんなに興奮しちゃってるのなら一回吐精処理しなくてはだめだね。仕方ないから先生の手で射精しちやいなさい」

「だ、だめですよ。恥ずかしすぎます！」

「そうねー。女の人にぜんぶ見られちゃうんだもんね。ほら、もっと腰ふって。思いきりどびゅどびゅ精子を出しちやいなさい」

「あああ、い、いけないよ、ああ」

しゅ、しゅ、ちゅく、ちゅぷ。

「見てるよ。カズ君の小さいちんちんが勃起してびくびくしてるとこ、ぜんぶ先生に見えちゃってるよ。恥ずかしいね、情けないねー。すっごく硬くて熱いよ、カズ君のおちんちん」

指の動きは変わらず肉棒を揺らし続ける。カクカクと揺れる腰を抑える術を、未成年の童貞男子が持つはずもなかった。

「かかっちゃう、かりんさんにかけちゃう！」

「ほら、おいで」

その優しい言葉が引き金となった。淫らに囁きかけるその唇が唾液で濡れているように見えた。

「あ」

びゅ、と間欠泉のように最初の一吹きがあった。

照明の高さまで飛んだろうか、高く浮いた白濁液は和仁自身の肩に落ちた。

びゅ、どびゅ、びゅ、びゅ。

「あああ」

「あん、やん」

女の子らしいかりんの悲鳴に合わせるかのように、ペニスの先から噴射されたそれは二

人の身体に降ってくる。

びゅ、びゅ。

——そういえば最近オナニーしてなかったな。

快感の渦の中で、ぼんやりと和仁は考えていた。合宿中なのであり、自分で処理する場所も猶予もなかったのだ。

「やん、すっごーい」

びゅ、びゅ、びゅるる。

ペニスの熱い鼓動をその手で感じながら、かりんはその小さな先端からとんでもない量の精液が溢れでるのを間近でとらえていた。

「ああううう」

恍惚とした、だらしのない表情をさらけだしながら和仁は腰を上げ、無意識のうちに最後の射精を彼女に向けてしまった。

どぶっ。

「やん」

濃ゆい精子の塊が彼女の頬に当たり、どろりと卑猥な曲線を描きながら岩に落ちていった。

「はあ、はあ、はあ」

「ああ、すっごいよ。カズ君。すごい量」

しばらく動けない腰をつかまれながら、和仁は目の前の女性の言葉に荒い息でうなずくしかできなかった。

「ほんとにすみません」

「ふふ、いいの。アタシが無理やり出させちゃったんだし」

それより嫌じゃなかった？ と訊かれ、ぶんぶんと首を横に振った。顔がカアッと赤くなるのを自覚しながら「最高でした」と呟いた。

和仁は今、精子で汚れた身体を彼女に洗い流してもらっていた。温めのシャワーが心地よく彼の皮膚を弾いていた。まだタオルを巻くことは許されておらず、無防備な肉棒をさらけだしたままだ。さすがに溜まった何日分かの精子を一気に出したおかげで今は勃起することなく縮こまっているが、小さくなったペニスを見られるのだって恥ずかしい

「かわいいお子様のちんちんだね」

うう。

ぴん、と指でペニスを弾かれた。

「ほんとにすごい量だったね、溜まってた？」

「少し」

そーだよ、合宿中はオナニーできないもんねーと無邪気に笑うかりんは顔に付いた精子を洗い流しただけで、まだ身体の所々に生臭い白濁液が付着している。彼女がシャワーノズルを持って動いた時に、むちむちした太ももの付け根が見えそうになる。

「はい、じゃあ次はおちんちんね」

「ああ」

柔らかくなった肉棒を再び触られる。ぴくん、と反応してしまう。その鼓動を手の平で感じたのか、かりんは「もう、元気なんだから」と気にせず洗い続ける。

「か、かりんさん」

「んー？」

「僕、もう我慢できません」

「え、もしかしてまた出ちやいそうなの？」

和仁は慌てて首を振る。視線の先には彼女の豊満なバストが布きれ一枚に包まれていた。その視線を感じ取った彼女は「あーごめんごめん」と笑う。

「そういえばまだ患者さんにお薬あげてなかったね」

「え」

はらり。

かりんはそれまで頑なに外さなかったタオルをあっさりと取り払った。

胸には洋ナシに似た大きなふたつのかたまり。薄桃色の乳輪と丸く小さいボタンのような乳首、乳房の山はゆるやかに曲線を描いてそこに実っており、とてもきれいな果実がそこにあった。美乳だ。

お腹には肉が多少ついていていたが、腰のラインにはしっかりとくびれがあった。下の豊かな繁みはVラインに丁寧処理されており、大きなお尻に似合っていた。シャワーから滴るお湯はその毛の先から地面に滴り落ち、その滴を呑みたいとさえ和仁は思った。

「す、素敵です。とても」

「あら、ありがとう」

それまで持っていたシャワーで付着した精液をざつと流すと、かりんは和仁の前に膝をつき、自らの乳房を突き出した。

「はい、お薬の時間ですよ」

「あ、ああ。かりんさん、いいんですか」

「飲みたくない？」

「の、飲みたい。飲みたいです！」

恥も外聞もなかった。彼女の右の洋ナシにしゃぶりつき、左のそれを揉みこんだ。

——や、柔らかい。

「あん、優しくね」

「す、すみません」

ちゅば、ちゅば。

味こそしなかったが、吸うほどに満足感が波となって押し寄せてくる。彼はかりんの胸を交互に舐め、吸い、その舌でいじり倒した。

「あん、すごいやらしい。やっぱりへんたい君だね。カズ君は立派なへんたい君だね」

「うう、違いますよー」

「あれ、まだ言うかな。往生際の悪い患者さんにはこうしてあげる」

そう言い放ち、かりんは和仁の陰蠢をぐっと掴む。

「あああ」

「ふふ、タマタマもかわいいんだね。ころころしてあげる」

白い指が二つの玉をもて遊んでいると、そのすぐ上にある肉棒は再び力強く天を向き始めた。

「あああ、見ないで。かりんさん、見ちゃだめです」

「すごい、どんどん大きくなってくるよ」

見られた。小さいそれから大きく変わる様子をすべて見られてしまった。その事実がやはり異常なまでの快感をひきつれて彼を襲う。

「もうちんちんが勃っちゃったね。そんなにおっぱい美味しい？」

「んー、お、美味しい。かりんさんのおっぱい、すごいよ」

「かわいいなー、えい」

「んぐ」

乳房が顔全体に押し付けられた。甘ったるい匂いが和仁を包み、和仁はやっぱり自分で腰を動かしてしまう。

「んん、んぐ」

「ふふ、息ができなくて苦しいでしょ」

「んー、んー」

ふはあ。

やっと解放された和仁の唇を、彼女のそれが襲った。

ちゅ。

「キス、しちゃったね」

「順番がおかしいような気がしますけど」

「それはカズ君がエッチすぎるからだよ。アタシはキスから始めようと思ったのに」

「う、嘘だ」

会話の間にもキスを繰り返す。やがてお互いの舌が絡み合う。

ぬるり。

彼女の舌がなめらかに動き、彼の歯を撫でたり舌を突いたりする。その動きに和仁も必

死になって自らの舌でついてゆく。かりんの唇はやや厚めで大人の妖艶さに満ちていた。

——ああ気持ちいい。キスってこんなに気持ちいいんだ。

正直、今の今まではアダルトビデオにてあんなにもキスを繰り返す男優、女優さんたちの気持ちこそそれまではよくわからなかった。でも。

今ならわかる。

——ああ、かりんさんのべろ、あったかい。

「ん、ん」

「ああ、あ」

お互いの鼻がこつんと当たり、彼女の呼吸を肌で感じる。キスをしてから、不思議と羞恥心は消え、代わりに今までとは違った満足感が和仁を包んでいた。彼はためらうことなく彼女を抱きよせ、ぷっくりと出たお腹に手を這わせた。

「あん、意地悪。スタイル悪くてごめんね」

「とんでもないです。最高の身体です、とてもえっちで」

「もう」

這わせた手が向かった先には繁みがあった。

「足、開いてもらっていいですか」と訊くと「へんたい」と彼女は笑って罵ってくれた。

握られたペニスがびくんと跳ねた。

「カズ君ってドMでしょ」

「わかりませんが、そうかもしれない。かりんさんに罵られると、すごく興奮するんです」

「ふふ、やっぱり」

しこしこ、と彼の肉棒を優しく愛撫してくれた。ああ、と身悶えながらも和仁も繁みの奥に手を辿りつかせることに成功する。

「カズ君」

「はい」

「女の人のそこに触るのは？」

「もちろん初めてです」

そこで彼女に腕を触れられた。

「あんまり乱暴にしちゃダメだよ。最初は指先で優しく、撫でるように」

「はい」

言われた通り、まだ見ぬ秘部へ指を添える。しゃりしゃり、と毛がかすかな音を立てた。

「毛、僕より多いですね」

「いや？」

「いえ、すごく興奮します」

「よかった」

突如、びくんと彼女の身体が跳ねた。

「あん」

「ここですか」

「そう、そこ、ゆっくり優しく」

触れた先には突起した何かがあった。それに人差し指でかすかな振動を与えるたびにか

りんの肩が、膝が震えた。

「あん、やん」

「ここなんですね」

返事もできない彼女がうなずく。

「ねえ、かりんさん。ここ、なんていうんですか」

「エッチ」

「教えてください、先生」

あん、やん。

びくんびくんと激しく跳ねるかりんに和仁は驚き、射精とはまた違った快感を彼に与えてくれた。自分のペニスを彼女のお腹あたりに当ててみる。ぶにぶにと柔らかい感触が鈴口を刺激するだけでなく、年上の女性に自分の恥部を押し当てているという事実には彼の肉棒は脈動を重ねた。

「やん、かたい、いやらしい」

「ねえ、教えてください。僕は今かりんさんのどこに触っているんですか」

今やすっかり身体を横たえて、和仁のされるがままになっているかりんは首を起こして

「クリトリス」と小さくつぶやいた。

「かわいい、かりんさん」

がぼっと彼女を抱きしめる。「なまいきつ」という言葉は無視する。

「あ」

勢いあまって、指はさきほど撫でていた部分の下側にいった、と思いきや、ぬるりと奥に入ってしまった。

——すごく濡れてる！

「いやん、恥ずかしい」

ぐじゅ、じゅぶ、と穴を指でかき混ぜるたびに音がした。

「かりんさん、すごいです。ぐちよぐちよじゃないですか」

「だって、あん。カズ君のちんちんがかわいいから」

「かりんさんこそ、すごくエッチじゃないですか。こんなに濡らして」

「あん、もう、バカ」

かりんの足が左右に開いてゆき、和仁の愛撫を受け入れやすい体勢に変わってゆく。もつといじって、と急かされているようで和仁は指をさらに激しく出し入れする。

「あん、いいよ、カズ君。ほら、おっぱいもいじって」

「はい!!」

空いていた手で乳房をつかむ。さつきよりも幾分か乱暴に揉みしだくが、彼女は身体をのけ反らせて「あん」と喘ぐばかりだった。

「か、かりんさん。僕も」

「んん」

何か言いかけた彼女の口を自らの口で塞ぐ。お互いの舌がもつれあう中、かりんは和仁のペニスを上下に激しく動かす。

しゅ、しゅ、くちゅ、しゅ。

ぐじゅ、ちゅぷ、ちやぷ、じゅぷ。

「あああ」

「あん、いやん」

お互いの性を愛撫しあう男女は白い湯気に包まれ、露天風呂全体を淫らな空気に変えていた。今は二人だけの空間なのだ。

「あん、カズ君。おまんこ気持ちいいの、すごい」

「か、かりんさん、エッチすぎますって」

「だって、あん。カズ君のちんちんもこんなに喜んでるよ。もうぬるぬる。もっと言うてほしい？」

くちゅ、くちゅ、しゅ、しゅ。

「言ってほしい。かりんさんの口からエッチな言葉が訊きたい」

「ふふ、カズ君のホーケーちんちん、すごく硬くなってるよ。我慢汁もこんなに。いやらしい、スケベ」

——ああ。

かりんのぶあつい唇から出る淫らな語句が湯気にまぎれて和仁の耳に突き刺さる。それらに煽られるように彼は彼女の大きなお尻をわしづかみにする。

「かりんさん、お尻おつきいです」

「やん、えっち、いやあん」

「ああこもやわらかい、すごい」

「もう、そんなお肉ばかりでイヤだね、カズ君は」

「ぜんぜん嫌じゃないです。すごく、その、素敵です」

「ほんと？」

「はい」

コンプレックスだったのだろうか。和仁の真剣な表情とその返事に気を良くしたのか、かりんは腰をくねくねと激しく振り乱した。

「あ、あ」

かりんの乳房に顔を埋める和仁はもはや限界だった。

「ん、僕イっちゃいそうです」

「いいよ、アタシも、もうすぐ、はん。だからっ。一緒に」

「ああ、かりんさん出ちゃう、かりんさんの指でまた白いのたくさん出しちゃうよ、ねえかけていい？ かりんさんのお腹にかけていい？」

「いいよ、かけて。白くていやらしいお汁、アタシのお腹にたくさんかけて」

二人の息遣いが一段と荒くなり、そして。

「あああああ！」

「はああああん！」

びゅ、どびゅ、びゅ、どぶっ。

びつくん、びくん、びく。

肉棒からまた大量の白濁液が彼女のお腹を淫らに汚し続けるなかで、彼女は小刻みに下半身を揺らせていた。彼女の秘部をいじっていた和仁の左手は、愛液でふやけていた。

へろっ。

思わず和仁はその左手を舐めてみると、こつんとおでこを叩かれた。

「いら、へんたい君」

「す、すみません」

全速ダッシュを繰り返した後のように、二人とも呼吸が荒かった。全裸のまま惰性で互いの性器や乳房をいじり続けていると、かりんが言った。

「続きはさ。東京でしようか」

「そうですね」

夜空の星だけが二人を見下ろしていた。澄んだ空気を煙が舞いあがるように湯気が天へと昇っていく様を二人で眺めていた。

ちゅ。

かりんが和仁の頬に優しく口づけをした。自らの乳房を彼の腕に押し付ける。

「気持ちいい？」

「最高です」

桃色に染まった乳頭をびん、と指で弾く。

「こら、遊ぶな」

怒られた。

つづく

この作品における、著作権は著者にあります。  
無断での使用は固く禁じます。

午後の美人  
編集部より